

医芸俳壇



長野 有泉 七種

朝からの猛暑に曇る街の空
納涼のまつは地酒に憩ひけり
稲妻の夜こと養ふ棚田かな
麻服の瘦軀とほとき亡師像
短命を歎くにあらず蝉時雨

新潟 中村 雄彦

川越しに浴衣の見える二階かな
運動会やる子見る親砂埃
水濁る変わらず動く蛙の子
日陰あるベンチに坐り粽食う
蚯蚓死す紐のごとくになり果てて

青森 秋霧 朝光

会いたくて迎火高くてかく焚く
灯を消して戻りねぶたの一人笛
胸に棲む人多かりき花野徑
古き歌ゆるく流れて夜長かな
彫りすすむ仏師夜長を余さざり

東京 小南 丁字

麦わら帽お田植え陛下影涼し
夏雲や目映い緑五重の塔
総長の駒場の招宴梅雨夕べ
俯瞰して花火の競演椅子に列
蝉しぐれ涼感しみ入る神宮路

長野 楢本 勝彦

剣振る一寸法師納涼会
美顔術夏のあそびの皺を解く
二輪草踊るリズムに美を撒きぬ
梅ジュース健康長寿天守照る
暮鳴いた雌つかまえた水のう

千葉 秋葉 琢磨

早わざの古法の姿鵜飼かな
涼しさや不滅の燈明比叡山
鈴虫の寺で説法聞き居りて
トロッコで嵯峨野を下り涼しけり
シベリヤに行きたし見たし敗戦忌

東京 篠田 那珈

避暑の宿冷静に侍す老女中
旧盆の村はしきたり変らざる
汗噴かせ無口となりぬ運転士
夏雲が筑波の嶺を包みたり
裏筑波

東京 初芝 澄雄

オーシンツク声をかぎりに鳴きかわし
山鳩は背戸山辺り高らかに
真木の実の甘き味わい舌に染み
白蓮の実赤々と輝きて
楠の木の幹真直に天に伸び

兵庫 廣 辻 逸 郎

辣蕪を剥ぐ手休めず母のこと
コオニユリ險しき道に沿ひて立つ
坂險し夏鷺に導かれ
少年の面影いずこ冷奴
墓のこと語らいていて大花火

青森 福 士 盛 大

羽の折れしとうほうの眼に涙かな
玄関のちろろの命誰が守る
草荒れし売地の空に虫の秋
朝散歩紅に輝く鰯雲
秋刀魚消え漁場を探す男かな



東京 福富 清子

東京 福 神 規 子

初潮や渡舟跡とは石ひとつ
水盤舎の水なみなみと今朝の秋
水打ちて土曜の午後の鉄工所
白木槿御典医たりし構へかな
朝顔のこの藍が好き厨窓

東京 福 富 清 子

炎帝に立ち向かはんと口紅を濃く
灯火管制知らず不夜城敗戦忌
B 29 はた蟬時雨耳老ゆる
実盛が兜の蔵に大西日
海底は大魚のとぶらひ鰯雲

青森 三 上 忠 英

からからと下駄の高鳴る菊日和
秋晴れや東京ツリー空に伸び
虫の声聞けば睡魔に襲わるる
炎天や高校球児砂詰め
禿頭のずらりと八つ月の宴

東京 初 木 秀 穂

七夕竹入院棟の隅に立つ
老鷺を聞きし話を聞くベット
微笑残し妻炎昼を帰りゆく
病む窓を登りきつたり天道虫
未だ暑き風総身に退院す

広島 渡 辺 晋 山

蟬時雨サイレンの音に停まりけり
八月の六日流灯川へ海へ
八月や九日の鐘天主堂
八月は慙愧いまなほ十五日
英霊の今。ヘルセウス流星群

福富さんの編集部への添え書きから

実盛が兜の蔵 芭蕉が「むざんやな甲
の下のきりぐす」と詠んだ実盛の兜は、
自分の出生地の小松市にある太田(ただ)
八幡神社の蔵に納められています。五句
めは金子みすゞの詩を土台に。